20

明朝初期の『回回薬方』編纂に 12 世紀のペルシア語医学書『宝庫』が果たした役割

尾崎貴久子
防衛大学校

明初の漢語イスラム医学書『回回薬方（以下『回回』とする）』は，モンゴル時代のイスラム医学の東アジアへの伝播をしめす証左として知られる．しかし従来の研究では，『回回』は内容的には中世イスラム医学書との関連があろうとされつつも，どのイスラム医学書が引用元か，漢語訳にはどのような特徴があるか，といった，いわゆる引用踏襲に関する具体的な調査・研究はほとんどなされていない．この書はもともと，全36巻の医学百科事典の体裁をもつものであったが，現存する巻は4巻のみである．発表者は既に残存巻のひとつ第 30 巻に記載されたレシピおよび第 34 巻における腹部損傷の外科治療からイブン・スィーナー『医学典範』との関連性につき考察した．第 34 巻の焼灼治療においては，10 世紀のアラビア語医学書 2 書（『医学典範』，マジュースィー『医学完全』）との引用踏襲の関連を発見している．これらの検討から，中世イスラム医学書原典のアラビア語ペルシャ語による記述と『回回』の漢文記述の一文一文を比較する手法は，『回回』の編纂背景としての東アジアのイスラム医学の伝播を知るに有効な方法であることが明らかになった．

今回の発表の目的は，『回回』と 12 世紀ペルシャ語医学書『ホラズムシャーの宝庫』（以下『宝庫』とする）の関連を，第 30 巻の調剤レシピの記述に焦点を当て考察する．『宝庫』は，中央アジアのホラズム地方に興ったホラズム・シャー朝の第二代君主クトゥブ・アッディーン（在位 1097–1127）に献呈された，初のペルシャ語医学書である（後代のイラン・中央アジアのペルシャ語圏においては，ペルシャ語による『宝庫』がアラビア語の『医学典範』よりも医学者医学生たちの拠り所とされたといわれる）．著者ジュルジャーニー（d. 1136）は現在のイラン北東部都市グルガーン近郊に生まれ，1111 年頃ホラズム朝の宮廷医となり，現在のトルクメニスタンの都市メルブで生涯を終えた．つまり『宝庫』はペルシャ語文化圏でのイスラム医学の集大成ともいえる書である．

これまでの調査では，『回回』の第 30 巻に所収される約 200 の調合薬のレシピのうち 150 レシピは『宝庫』のレシピと，そのうちの約 80 においては類似した記述が『医学典範』にみられた．なお，『宝庫』の内容と，この書より約百年前に編纂されたイブン・スィーナーの『医学典範』の内容とは深い関連が指摘されるものの，詳細な研究はいまだなされていない．

発表では最初に，『回回』第 30 巻の引用元は，『宝庫』と『医学典範』どちらなのかを明らかにするため，文中の「我」とはだれか，という問いを掲げる．この検討はつまり，『回回』第 30 巻は，ペルシャ語医学書『宝庫』とアラビア語医学書『医学典範』いずれの書を土台としたか，どのような知識的背景を持った人物が翻訳・編纂に関わったかが明らかになるであろう．いわばイスラム医学の東アジアへの伝播経路のひとつが浮かび上がろう．

次に『回回』の巻中の「一年間の薬」という名の薬に着目する．アラビア語中世イスラム医学書の記述からは，9・10 世紀の中東イスラム世界の医師たちが，インドで常用されたこの薬を知り，彼ら自身の治療に導入しようとした尽力をみることができる．10 世紀中東のイスラム医学の治療者が「一年の薬」を自家薬籠中のものとしたこの事例は，他地域の医学情報の獲得・吸収という出来事の一つのパターンを提示するものといえよう．